



二輪草だより

平成31年1月号
発行:二輪草センター

センターの活動予定

◆2月下旬 二輪草だより2月号発行



第32回 二輪草セミナー 開催のお知らせ

共働き医師を親にもって

日時：平成31年2月8日(金) 18:00~19:00

場所：実験実習機器センター カンファレンスルーム(3階)

対象：医学生・研修医・全職員



“恋人に「女医の娘って可哀想だよな」と言われた話し”
市立札幌病院 研修医 横関 恵先生 (本学第39期卒業生)

「男性医師からみる共働きの生活～結婚・留学・出産・育児～」
旭川医科大学 消化器・血液腫瘍制御内科 長谷部 拓夢先生

※託児あります【事前予約制】

ご希望の方は二輪草センターまで、ご連絡ください(2月5日締切)

病児一時預かり室、バックアップナース、病児・病後児保育室、カウンセリング相談
【12月20日～1月19日までの利用状況】

病児一時預かり室	依頼回数	0回	利用回数	0回
バックアップナース	依頼回数	17回	稼働回数	14回
病児・病後児保育室	依頼回数	8回	利用回数	8回
カウンセリング相談			利用回数	2回

* 病児一時預り室、病児・病後児保育室は全職員・学生がご利用になれます

【お問い合わせ先】旭川医科大学 二輪草センター(復職・子育て・介護支援センター)

〒078-8510 北海道旭川市緑が丘東2条1丁目1-1

TEL 0166-69-3240(内線3240) サンニンヨレ FAX 0166-69-3249

開設時間8時30分～17時15分 E-mail: nirinsou@asahikawa-med.ac.jp

ホームページ <http://www.asahikawa-med.ac.jp/hospital/nirinsou/>



『看護学生と看護師の集い』終了報告

看護職キャリア支援職場適応支援担当 菊地美登里

11月27日(火)、「看護学生と看護師の集い」を開催しました。今年度のテーマは『私のキャリアのターニングポイント』としました。誰もが仕事を続けるうえで、悩み決断しながらキャリアを重ねているのだと思います。そこで今回、どんな時に悩みどう決断したのか、そのプロセスが今の自分にどう繋がっているかについて、3人の看護師に自分自身のヒストリーを話して頂きました。

4階西NS副看護師長相原広美さんは、助産師としての23年間をふりかえり、何度も迷い悩みながらも、その時々でモデルとなる先輩の存在や考えるチャンスを与えてくれた上司に恵まれ乗り越えてきたこと、助産師として妊産褥婦や家族・子供に寄り添える看護をしたい、そのために「なにが必要か」「なりたい自分、将来の自分」を考えることが決断の基になっていたと話してくれました。そして、自分はどうかあるべきかを考え迷うことは、悪いことではなかったと振り返ってくれました。



8階西NS看護師鉄川洋平さんは、社会人を経験後、看護職の道に進むことを決断しました。その大きな決断の時に「自分はどんなことが好きか、興味があるか」を考え、「人と接する仕事」を選んだとのことでした。看護師となって働くうえで“燃え尽き”そうになった時に、上司の支えや看護観が変わるような役割を体験したことが、自分にとってのターニングポイントになったこと、それまで「変化」を求めてきた自分が、ここでは「現状維持」を選択したと話されました。そして、自分の選択した道が間違っていなかったと思えるように努力したいと振り返ってくれました。

6階東NS看護師國本紅美子さんは、祖母の訪問診療・訪問看護の経験をきっかけに、「がん看護」に関心を持ち、いつでもどこでもどんな時でも「患者さんの力になりたい」との思いを大切にしてきました。そんな時に、上司から「患者さんの力になりたいって、何をしたいの?」と問われ、それまでの自分の看護を振り返る機会になり、「がん看護」をしっかり学びたいとの思いで大学院への進学を決断したとのことでした。大学院では、様々な人との充実したディスカッションがあり、自分本位で患者さんと向き合っていた自分自身の価値観に気づかされ、今は「患者さんの力になる」答えを少しずつ見つけることができるようになり、これからも努力をし続けたいと話してくれました。

3人それぞれにヒストリーがあり、とても感慨深いお話しでした。熱心に参加された学生さんからは、「自分のキャリアを考えるうえで大事にしたい視点を再確認できた」「ターニングポイントとなった時の考え方など、とても勉強になった」などの感想がありました。10月の『看護職キャリアマネジメント研修会』で、講師宮城先生は、「人間は安定と不安定を繰り返し発達する。キャリアも同じで、不安定な時期があることで、立ち止まり自分を立て直すことができる。不安定な時期はむしろ発達するために重要な意味を持つ」と話されました。まさに、今回の3人のヒストリーそのものであると感じました。

